

2023.6  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

とよ や  
富 薬

6号

第45巻  
No.407



カギカズラ *Uncaria rhynchophylla* Miq. (アカネ科 *Rubiaceae*)

**生 薬** チョウトウコウ（釣藤鉤）春、秋に鉤つきの若枝を採取し、鉤を中心に上下数センチを切り取り日干しするか、蒸したのち日干しする。

**成 分** インドールアルカロイド:rhynchophylline,isorhynchophylline, hirsutine,hirsuteine,corynantheine,dihydrocorynantheine等。

**効 能** 鎮痙、鎮痛薬として高血圧動脈硬化による頭のふらつきや目まい頭痛に応用する。主に漢方処方薬として血圧降下、消炎、鎮痙の目的で釣藤散、抑肝散、七物降下湯等に配合される。



生薬 チョウトウコウ（釣藤鉤）

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



第十四日本薬局方第一追補から収載された生薬で、カギカズラ *U. sinensis* (華釣藤)、*U. macrophylla* (大葉釣藤) の通例とげと規定されています。国内にも自生するカギカズラは本州(千葉県以南)、四国、九州の暖帯や亜熱帯に自生し、広東、広西、雲南、貴州、福建、湖南、湖北、江西省など中国南部の温暖な地域に分布し、やや湿気のある林縁を好んで自生する高さ1-3mにもなる常緑の藤本で、茎は方形で無毛、葉腋から短枝が変形して下に曲がった鉤が左右に2本出るものと1本出るものが節ごとに交互につき、他のものにひっかけて這い上がります。葉は対生し、葉身は楕円形、紙質、両面無毛。托葉は2深裂し、裂片は広線形。花序は球形で径約2cm、長さ2-3cmの柄の先につきます。萼裂片はほぼ三角形、花冠は白緑色、花柱は外へ長く伸びます。さく果

は長さ約5mm、種子は長さ約0.5mm、両端に長い翼があります。花期は6-7月、果期は9-10月。華釣藤(トウカギカズラ)は四川、広東、広西、雲南、貴州、湖南、湖北、陝西、甘肅省など中国南西部に自生し、高さ3mになり、茎は方形でカギカズラより4稜が明確で、鉤は葉腋の近くに生じ、葉は卵形でやや大きく、薄紙質。托葉は全縁で半円形。花序は径3cmと大きく、花期は6-7月、果期は10-11月。大葉釣藤は広東、広西、雲南省、海南島など暖帯から亜熱帯に分布し、高さ12-15mにもなり、茎は扁平で褐色の粗毛がまばらにあり、1節ごと2つの鉤があります。葉は楕円形で、やや革質、上面は脈上に毛があり、下面には黄褐色の毛が密生します。托葉は2深裂し、裂片は狭卵形で、花序は径4cmと大きい。花期6-7月、果期は10-12月。

釣藤の名は『名医別録』(502-536)から登場します。「釣藤、微寒、毒無し。小兒寒熱、十二驚癇(あらゆる痙攣性疾患)」と、陶弘景(456-536)は「建平(四川)に産する。また甲藤ともか書く。小兒の治療に用いるもので、他の方には入れない」と言い、専ら小兒治療薬として用いたようです。『新修本草』(659)には「釣藤は梁州(陝西省)に産する。葉は細長く、茎の間に刺があつて釣鉤のようだ」と釣り針のような刺の特徴をあげています。『図経本草』(1062)には「蘇恭(599-674)は梁州(陝西省)で産し、今日では興元府(陝西省)にもあるという。葉は細く茎長く、節間に釣鉤のようなどげがある。三月に採る。葛洪は小兒を治す処方にこれを多用す」と植物の特徴が記されています。南宋の『普濟本事方』(1132)に「釣藤散」の処方収載されていることからこの頃からよく使われた生薬のようです。

日本の本草書には『本草和名』(918)に「釣藤 一名甲藤(出陶景注)、唐」とあり、『名医別録』の引き写しと思われ、実際に薬として使用してはいたかは疑問です。江戸初期の『多識編』(1612)には「釣藤 今案ずるに布知都利波利 倒掛藤 黄藤」と和名の表記があり、国内産のカギカズラが薬用に用いられていたと考えられます。先に述べたように「釣藤散」や明代の医学書「保嬰撮要」(1556)の「抑肝散」が国内でも用いられるようになっていたことから国内産が使われたのではと推察されます。『本草綱目啓蒙』(1803)には「城州(山城国)、和州(大和国)、藝州、長州(長門国)、防州(周防国)、讃州(讃岐国)、紀州、遠州、その余州山中にあり。薬舗にて売るものは多くは藝州の産なり。年久しきものは藤蔓甚大にして木のごとくなる。其蔓嫩なるときは方形のごとくみゆ。年を経るものは圓なり。葉形長くして尖り蠟梅葉に似て澁らず光あり。嫩葉は微紅色もな両対す。葉の微し上の方に対して両鉤を生ず。梢に至るまで皆此のごとし。その鉤みな下に曲がり緑色。秋にいたり灰色に変じ自らおつ。葉には嫩鉤を用ゆべきこと『本草彙言』(1621-1627)に見ゆ。紫色選びて梗純を去り嫩鉤を用い其功十倍といえり。この蔓の末に五寸許の枝をいだし、小叉を対生し、小花簇りて正圓毬をなす黄褐色、大さ六、七分花謝して小毬のこる形楊梅のごとし」と国内での自生地および産地、植物の形態などが詳しく記されています。(村上守一 記)